壺井栄50回忌記念事業　壺井栄五〇年の暦

壺井栄年譜

元号	西暦	年齢	壺井栄の出来事	社会動向と関連文学
明治　32	1899	0	8月5日、香川県小豆郡坂手村に岩井藤吉・アサの5女として生まれる。 父藤吉は醤油樽造りの親方で稼業は繁盛し、栄は祖母と9人の兄弟姉妹、孤児2人さらに住込み職人の大所帯の中で育つ。	
33	1900	1		義務教育の無償化（改正小学校令）
36	1903	4		小学校国定教科書令の発令。
37	1904	5		日露戦争。軍国主義思想の広がり。自然主義文学起こる。
38	1905	6	4月、坂手尋常小学校に学齢より1年早く入学する。島の伝説や自身の身の上話を子守唄のように語る祖母に可愛がられて、物語の世界のおもしろさを知る。	
40	1907	8		義務教育が6年となる。
42	1909	10	小学5年生の時、家が破産し借家住まいの貧乏生活になる。この前年頃、稼業の衰退を予見し、姉たちは嫁や養女に出される。	
43	1910	11	女中奉公をしていた次姉が病死。	日韓併合。大逆事件。石川啄木『一握の砂』刊行。
44	1911	12	3月、坂手尋常小学校を卒業。1等賞をもらう。4月、内海高等小学校に入学。 栄は長兄のように師範学校へ進み小学校教師になる夢を持っていた。兄から毎月送られる少女雑誌「少女世界」「少年少女」を楽しんで読んだ。	平塚らいてう等、女性解放の雑誌「青鞜」を発刊。
大正　1	1912	13		陸軍や軍閥の横暴に対して第1次護憲運動起こる。
2	1913	14	2月、母が45歳で10人目の末娘貞枝を産む。3月、内海高等小学校を卒業。父は渡海屋（海運業）に転職し、それを手伝う。女学校の講義録を買って読む。	
3	1914	15	11月、家の家計は苦しく、坂出の女子師範へ進むどころではなく、坂手郵便局へ見習い事務員として就職。	第1次世界大戦に参戦、ドイツ領南洋諸島など占領。
4	1915	16	2月、正式の坂手郵便局事務員となり、郵便・電報・電話・為替・貯金・保険・年金・恩給業務などの過重業務をこなし、家計を助ける。 母が過労のため脳溢血で半身不随となる。	
5	1916	17	10月、祖母イソが82歳で死亡。	大正デモクラシー運動が起こる。
6	1917	18	3月、過労から肋膜炎、脊髄カリエスとなり、病気療養のため郵便局を一旦退職。 前年頃、文学志望の黒島伝治と交流が始まり、幼なじみで同好の岡部コサキを紹介。結核を病む文学好きの三角関係（友情と恋愛）が村の噂になり悩む。	ロシア革命でソビエト政権成立。 中条百合子『貧しき人々の群れ』を刊行。
7	1918	19		米騒動。児童雑誌「赤い鳥」創刊。
8	1919	20	長兄がスペイン風邪で急死。岡部コサキ肺結核で死亡。	有島武郎『或る女』を刊行。
9	1920	21		日本帝国、国際連盟に正式加入。小豆島高等女学校開校。
11	1922	23	5月、坂手郵便局に復職。すぐ下の妹スエが早産して死亡。未熟児真澄を坂手に連れ帰り育て始める。 11月、ハシカにかかり、その高熱のため脊髄カリエスが好転。シベリア出兵に徴用されていた黒島伝治が肺結核を悪化させ、兵役免除で帰島、交友復活。 菊池寛の小説「父帰る」有島武郎の「或る女」「宣言」などを読み感動する。	日本共産党が非合法下で結成される。
12	1923	24	2月、郵便局をやめ、村役場に戸籍係や兵事係として勤務。 島にスケッチ旅行に来ていた大阪の青年画家、大塚克三（後に舞台装置家として大成）と恋し合う。さまざまな事情で結婚には至らなかった。	関東大震災起こる。混乱に乗じ、警察は朝鮮人、社会主義者、労働運動指導者などを逮捕、虐殺。
13	1924	25	黒島伝治の親友で隣村の詩人壺井繁治と文通。同人誌『ダムダム』が送られて来、新傾向の詩はわからなかったが定期購読料を東京に送る。	
14	1925	26	2月、壺井繁治から誘いの手紙をもらって上京。失恋や世の中の矛盾に気づいて破れかぶれになっていた者同士、再出発を目指して結婚。 繁治の詩人仲間、林芙美子や平林たい子夫妻を身近に知る。12月、母アサ死去。3歳の姪真澄を新婚家庭に引き取り養育する。	日ソ国交回復。労働・社会運動を取締まる治安維持法公布。
昭和　1	1926	27	伝治が小説「銅貨二銭」「豚群」を「文芸戦線」に発表し、農民作家として認められる。	
2	1927	28		金融恐慌。知識人は共産主義革命の到来を自明と考えた。
3	1928	29	繁治がマルクス主義者となり、全日本無産者芸術連盟（略称「ナップ」）の機関誌「戦旗」の出版・経営責任者となる。	共産党「赤旗」創刊。　黒島伝治、反戦小説「渦巻ける鳥の群れ」を発表。
4	1929	30	「戦旗」を流行させた手腕が買われ、昭和6年、拡大組織化した日本プロレタリア文化連盟（略称コップ）の出版所長に就任。 コップは方針を芸術より政治重視に転換、共産党思想の大衆への普及・宣伝を使命としたため、国家権力による激しい弾圧（治安維持法違反）を受けた。	小林多喜二「蟹工船」、宮本顕治「敗北の文学」を発表。
5	1930	31	栄は不景気な東京で多くの失業者を見て「稼ぐに追いつく貧乏なし」という道徳の嘘を知った。社会改革に目覚めて夫の仕事に協力。	
6	1931	32	「戦旗」社に務めた後、「働く婦人」の編集部などを手伝う。 夫を刑務所にとられ生活は困窮するが真澄とともに頑張り、「プロ文士の妻の日記」「屍を超えて」などプロレタリア小説の習作を発表。	満州事変が起こる。
7	1932	33	小林多喜二が警察で虐殺された昭和8年、父藤吉永眠。	
8	1933	34		日本、国際連盟を脱退。
9	1934	35	3月、繁治が転向。コップが壊滅させられたことを知り、共産主義運動から一切手を引くことを条件に刑務所を出る。 栄は昭和14年頃まで宮本百合子の秘書兼家政婦のような仕事をして生計を立てる。	
10	1935	36		共産党中央部壊滅。
11	1936	37	繁治が転向後の失意の中で、栄とも親しい中野鈴子と不倫関係に落ちる。栄は大ショックを受けるが、多くのものを与えてくれた夫婦の絆を守る。	陸軍のクーデター、二・二六事件起こる。
12	1937	38		日中戦争始まる。日独伊三国防共協定。
13	1938	39	9月、生まれついての弱視の娘に先端医療を受けさせたい一心で神戸に向かった母親の帰りを、けなげに郷里で待つ幼い長男の物語「大根の葉」（栄の妹貞枝の子供がモデル）が、窪川稲子・宮本百合子の力添えで雑誌「文芸」に載る。芥川賞候補となる。 障害に負けない「大根の葉」の女児の成長の物語が「風車」「赤いステッキ」として書き継がれ、6作のシリーズものとなる。	国家総動員法公布。
14	1939	40		第二次世界大戦始まる。
15	1940	41	1月、初めての童話「まつりご」を発表。2月、栄の人生観に決定的な影響を与えた祖母や両親の大きな背中をしのび、苦労を共にして満たされた家族愛を描いた小説「暦」を雑誌「新潮」に、解放運動犠牲者家族を描いた「廊下」を「文芸」に発表。3月、第1作品集『暦』（「暦」「大根の葉」他4篇収録）を新潮社から刊行。	
16	1941	42	2月、単行本『暦』が第4回新潮文芸賞受賞。職業作家としての地歩を固める。	国民学校令（義務教育8年制へ）。太平洋戦争勃発。
17	1942	43	3月、繁治、第1詩集『壺井繁治詩集』を刊行。5月、栄、童話「十五夜の月」を島崎藤村編『新作少年文学選』に発表。 従来のメルヘンではない写実童話として高い評価を受ける。	東条内閣翼賛政治会をつくる。ミッドウェー海戦で日本軍が敗れ、以後敗北が続く。日本文学報国会、大日本言論報国会設立。
18	1943	44	童話『海のたましい』を講談社から刊行。10月、黒島伝治、小豆島で病没。	
19	1944	45	初めての童話集『夕顔の言葉』（8篇収録）を紀元社から刊行。昭和19～20年は戦況悪化で一般文芸雑誌が廃刊に追い込まれ、児童雑誌が発表の場となる。	神風特攻隊の初出陣。
20	1945	46	9月、原爆投下に抗議する「石臼の歌」を「少女倶楽部」に発表。戦災孤児となった長兄の孫、右文を引き取り育てる。 12月、戦前プロレタリア文学運動にかかわった文学者を中心に新日本文学会創立、繁治は中央委員に選ばれ、栄も会員となる。	東京大空襲。広島・長崎に原子爆弾投下。日本ポツダム宣言受諾。 占領軍の民主化政策として、財閥解体、農地改革など。
21	1946	47	3月～7月、「海べの村の子供たち」を「少国民新聞」に連載。	日本国憲法の公布。①主権在民、②基本的人権の尊重、③戦争放棄を3大特色とし、民主化を求める国内外の世論を反映した。
22	1947	48	7月、プロレタリア作家徳永直の後妻になった妹シンが2か月で離別されたいきさつを、小説「妻の座」として「新日本文学」に連載し始める。	教育基本法、学校教育法の公布。「石臼の歌」が童話集『十五夜の月』に収められる際、一部がGHQのプレスコードに引っかかり削除された。
25	1950	51	1月、坂手の酌婦たちの生活を描いた「屋根裏の記録」を「中央公論」に発表、好評を得る。	朝鮮戦争勃発。レッドパージ、占領軍の命令で共産党員とそのシンパが公職追放を受けた。
26	1951	52	童話集『柿の木のある家』（『海のたましい』の改稿）で第1回児童文学賞受賞。	日米安全保障条約締結調印。
27	1952	53	4月、『母のない子と子のない母と』（「海べの村の子供たち」を前年に改稿、改題）と童話集『坂道』で、芸術選奨文部大臣賞を受ける。 名実ともに昭和20年代を代表する童話作家となる。12月、『二十四の瞳』を光文社から刊行。	日本の独立達成。破壊活動防止法が共産主義的運動の抑圧のためにつくられた。
28	1953	54	4月～、「岸うつ波」を「婦人公論」に連載。	NHKテレビが放送開始。
29	1954	55	9月、監督木下惠介、主演高峰秀子の映画「二十四の瞳」（松竹）が全国的に大ヒット。流行作家になる。	漁船第五福竜丸ビキニ水爆被災事件。
30	1955	56	4月、前年暮れに刊行した自伝連作小説『風』で第7回女流文学者賞を受ける。	広島で第1回原水爆禁止大会。
31	1956	57	1月、『褞袍（うちかけ）』を講談社から、3月、『雑居家族』を筑摩書房から刊行。5月、新書版『壺井栄作品集全15巻』（筑摩書房）の刊行が始まる。	日ソ国交回復。国際連合加入。
35	1960	61		日米新安全保障条約調印。
39	1964	65	3月、旧家の封建制と戦い、性的にも経済的にも自立してたくましく生きる女性像を描いた長編小説『柚原小はな』を新潮社から刊行。 9月、『壺井栄児童文学全集全4巻』を講談社から刊行。持病のぜんそくに苦しむ。	東京オリンピック開催。
40	1965	66	8月、『柚原小はな』の続編『母と娘と』を新潮社から刊行。10月、『壺井栄名作集全10巻』をポプラ社から刊行。	日韓基本条約の調印。
42	1967	67	5月、内海町名誉町民章を受ける。6月23日、ぜんそくのため67歳で逝去。	中国で文化大革命起こる。

1.

『暦（こよみ）』

新潮社　昭和15年3月9日刊行

貧乏であっても、共に暮らすことで互いの人生が豊かにされるという、栄の生活信条を鮮明に打ち出した第1短編小説集。暦、桃栗三年、大根の葉、風車、赤いステッキ、廊下を収録。

2.

『ともしび』

博文館　昭和16年12月26日刊行

目の障害や差別に打ち勝ってたくましく育っていく女児とそれを応援する家族の物語「大根の葉」シリーズ6篇を収録。栄はこれを書いた時、モデルへの愛情で泣き笑いを止められなかった。

3.

『柿の木のある家』

山の木書店　昭和24年4月20日刊行

海辺の村の子供たちの四季を描いた長編童話「海のたましい」を戦後に改作し戦時色を削った「柿の木のある家」ほか童話9篇を収録。

4.

『母のない子と子のない母と』

光文社　昭和26年11月10日刊行

昭和23年に雁書房から刊行した『海べの村の子供たち』を全面改稿した長編童話。戦争で夫と子供を亡くした子供好きのおとらおばさんが、母と妻を亡くした一郎父子と一緒になって、暖かな家族を作り直そうとする話。反戦童話、シベリア抑留者差別にも言及。

5.

『坂道』

中央公論社　昭和27年3月30日刊行

戦後の生活難の中、引き揚げ孤児の堂本さんは父の親友の温かい援助で屑屋をしながら夜学に入る。その頑張りの中、職業差別を受けることで人間の誇りに目覚める。この表題作ほか11篇の童話を収録。

6.

『二十四の瞳』

光文社　昭和27年12月25日刊行

子供本位の教育を願う大石先生と、初めて分教場で教えた12人の子供たちとの戦中戦後の交流を描く。戦前の学校教育が天皇制軍国主義国家に奉仕するものであり、国民の幸福を求める権利に基づくものでなかったことを批判。反戦小説。

7.

『連作小説　風』

光文社　昭和29年12月5日刊行

花、歌、風、空の自伝的連作小説を収録。花は郵便局時代の伝治をめぐる三角関係、歌は、脊髄カリエスで死を覚悟していた頃の伝治と繁治との交際、風は繁治との新婚時代、空は共産主義文学運動弾圧時代を描いたもの。

8.

『柚原小はな』

新潮社　昭和39年3月20日刊行

栄と同年生まれのヒロインは、孤児から一躍旧家の嫁になる幸運をつかむ。それもつかの間、船員の夫は急死。三十後家はむつかしいの言葉通り、若い僧と恋に落ちるが後悔はしない。封建的道徳を破り家を出て華やいで生きる。執着のない自由な女の生き方を描いた晩年の名作。

9.

『壺井栄全集12巻』

文泉堂　平成11年2月11日完結

壺井栄研究の第一人者鷺只雄氏によって編集された最も新しい全集。12巻に著作目録、詳細な年譜、参考文献目録がついている。

tsuboi50_chronology_160614.indd 1　16/06/14 5:20

The 50th Anniversary of Sakae Tsuboi

The Chronological Table

壺井栄 年譜

壺井栄50回忌記念事業

壺井栄五〇年の暦

壺井栄プロフィール

壺井 栄　Sakae Tsuboi

1899年8月5日－1967年6月23日。香川県小豆郡小豆島町坂手生まれの小説家、児童文学作家。反戦（反核）平和を訴えた「石臼（いとうす）の歌」と「二十四の瞳」は21世紀の現代まで国語の教科書に載り、映画化も繰り返されている。プロレタリア文学運動のかかわりの中から出発した作家だが、イデオロギー的ではなく、現実の庶民生活の中にある互いの助け合い、たくましくおおらかな人間愛を自己の体験をとおして描く。貧困、病気や障害、封建的家制度や社会の変化にもてあそばれる弱者の立場に立ち、その問題解決を女性の自立や子供たちの革新性などに托している。特に栄の児童文学は、誰もが幸福である社会の実現に向けての夢を、おばあさんが昔語りをするように子供に語り継いでいる。人間生活と自然との共生の大切さについても訴えている。「大根の葉」「暦」「柚原小はな」など名作の多くが、ふるさとの坂手村を舞台に方言を駆使して描かれ、文学のテーマを効果的に押し出している。

壺井栄と同郷の作家

壺井繁治
Shigeji Tsuboi

1897–1975　詩人。小豆郡苗羽村堀越（現小豆島町）の豊かな農家に生まれた。早稲田大学中退。『壺井繁治全詩集』、自伝『激流の魚』などがある。階級意識を強い風刺性で歌った。

黒島伝治
Denji Kuroshima

1898–1943　小説家。壺井繁治と同郷の農家に生まれた。郷里の農村生活を描いた「村の網元」「豚群」などの農民文学、また、「渦巻ける烏の群」などの反戦小説を描いた。

Credit

●文責： 須浪敏子（四国学院大学名誉教授）
●参考文献： 鷲 只雄『評伝 壺井栄』（2012 翰林書房）、戎居 仁平治『壺井栄伝』（1995 壺井栄文学館）
●デザイン： 樋笠彰子
●制作： 壺井栄顕彰会
●協力： 小豆島町立図書館「むとす館」、壺井栄文学館（二十四の瞳映画村）

tsuboi50_chronology_160614.indd 2　16/06/14 5:21